

て腦脊髄液蛋白の分割測定を行ひ次の如き結果を得た。即ち第1期に於て既に總蛋白量並に「グロブリン」量の増加を認め、第2期に於ては總蛋白量、蛋白商の平均値は第1期よりも高く、1例に於ては中樞神經微毒に見る如き増加を認めた。第3期に於ては爾他腦脊髄液反應に比べて蛋白の増加は著明である。(八木抄)

猫に於ける鼠蹊淋巴肉芽腫症の接種

實驗

山本欽三郎

著者は成熟若小貓を以て鼠蹊淋巴肉芽腫症の移植實驗を行ひ、その腦内接種により猫を本症に罹患せしめ得る事を、組織學的所見並に皮内反應によりて慥め得た。然し猫は實驗鼠蹊淋巴肉芽腫症に於ける猿或は栗鼠の如き顯著なる固有症狀を示さない。「マウス」を通過する接種原を用ひ猫を2代迄累代移植し得たが3代目に於て中絶した。直接人體材料を用ひての接種は接種原が二十日鼠を立派に罹患せしめ得られる充分なる病原性存するに不拘猫を罹患せしめ得なかつた。(八木抄)

金鹽の網狀織内被細胞系に及ぼす影

響に就て(生體内金鹽分布に關する

實驗的研究 4回報告) 佐野 次郎

著者は金鹽の生體内分布に關する實驗的研究を行ふに當り、國産一部新金製劑 Aurothiophenolmetacarbonsaures Natrium 3%水溶液を使用し、之が網狀織内被細胞系に及ぼす影響を見るべく注射家兎に就き Adler-Reimann 氏「コンゴ赤」試験及び Kauffmann 氏皮膚水疱内「モノチアテン」試験の兩機能検査法を施した。尙注射後一定時間に於ける家兎の組織學的所見を綜合するに、金の生體内分布に於て網狀織内被細胞系に沈着するものが多い事實は明かであるが、單に此の如き所見より金の該細胞系に及ぼす影響の特殊性を臆測する事は出来ない。(八木抄)

皮膚科泌尿器科雜誌

第41卷 1號(昭和12年1月)

レックリングハウゼン氏病知見補遺

平賀 芳雄

著者は12例のレックリングハウゼン氏病患者に就て、弛緩性皮膚厚層症、腦脊髄液、腦髓「レントゲン」像、植物神經系機能及び皮膚腫瘍中の「ズダン」嗜好性顆粒細胞等を研究し、其結果皮膚腫瘍或は青色斑多き部位に於て皮膚は弛緩し柔軟に肥厚して異常な伸展性を有するを認め、假令肉眼的には腫瘍を認め得ざる場合と雖も、此に據つて皮膚深層に於ける腫瘍の存在を察知し得られる場合があり、此の症狀を神經纖維腫性弛緩性皮膚厚層症と稱して本疾患の症狀中に加へる事を適當と思惟すと。(八木抄)

實驗的家兎微毒に於ける血清「リポ

イド」量に就て(第2報)

中西 正男

脾剔出微毒家兎にては脾剔出が血清「リポイド」に及ぼす影響と同時に「スピロヘータ」接種が血清「リポイド」に及ぼす影響を認め得られる「コレステリン」は接種後下疳の發生と共に増量し、或は増量せずとも減量の傾向は緩慢となり血清反應陽性期には反つて僅かに減量し、最低價となり、下疳の吸收時には再び増量を來すが下疳全く吸收されるれば再び減量を來す。脂酸及磷脂體も「コレステリン」と略々同様の経過を取る。且無脾微毒家兎にては有脾微毒家兎よりも臨床徵候が著明である。(八木抄)

人體皮膚組織に關する研究

第3篇 皮膚諸要素の部位的及年齡的

差異に就て(特に彈力纖維の年齡的

變化との關係に就て)

江尻伊三郎

著者は初生兒より77歳迄50例の屍體に就き、頭部、前額、眉部、眉間、上眼瞼、下眼瞼、額部、前耳部、顳骨部、鼻頬鏡、鼻背、上唇、上紅唇、下顎角、頤部、耳朵、側頸部、上膊伸側、前膊伸側、手背及足背等より總計718個の皮膚片を切除し、彈力纖維の年齡的變化との關係を觀察した。角質層、顆粒層、皮脂腺、細胞浸潤は年齡的變化を認めないが、表皮突起、色素増加、毛孔擴大、毛細血管擴張は年齡の増すに従ひ輕度の變化を示し、特に棘狀層は頭部、顔面に於て萎縮し、上膊伸側、手背及足背にて